

# 教職大学院 Newsletter No.

福井大学大学院 福井大学·奈良女子大学·岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4

2018.8.16

#### 福井大学教育学部附属幼稚園の展望

~子ども・教員のための「かけがえのないモデル園」となるために~

福井大学教育学部附属幼稚園 副園長

福井大学大学院福井大学·奈良女子大学·岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 准教授

斎藤 弘子



福井大学教育学部附属幼稚園には、四季を通して様々な花が咲き、子どもたちをいつも優しく包む緑豊かな空間がある。教員があい年月をかけて築いた場」では、子どもたちが自ら手を伸ばは、子どでの色の美ははやで香り、様々な植物の香りを感じながら、友達とと

もに、色水遊びを展開する。

年上の子どもたちの姿に憧れを抱き、自分も綺麗な色水を作りたいと願う。そっと花びらを摘み、水を加え、すり潰す動きに集中し、何度も試行錯誤し、やり方を工夫し、最後までやり遂げようとする。できた色水を見て充実感を味わい、自然の色の美しさに感動し、自分なりの言葉で表現し、友達との対話を楽しむ。見てほしい・知らせたいと願い、みんなで見せ合う。友達が作り出す色水と見比べながら、違いの面白さや不思議さが、植物の種類や特徴、作り方のコツへの気づきとなり、話し合いが生まれる。色と香りでイメージを広げ、ジュース屋ごっことして大勢が楽しめる遊びへと発展させる。このように、様々な感覚を働かせ、子ども自身が主体的に作り出す遊びは、教育の基盤となる多様な力を引き出す。

幼児教育は、学校教育の始まりとして、自分の成長に嬉しさを感じ、身のまわりの自然も友達も価値ある存在として尊重し、力を合わせて豊かな生活を送ろうとする子どもたちを、丁寧に育てるところである。教育課程をもとに、必要な空間・時間を子どもたちに提供し、内側からわき上がる「学びに向かう力」と、知識・技能の基礎、思考力・判断力・表現力等の基礎を育て続ける。子どもの主体性と教師の意図性のバランスを図り、個のよさを集団の育ちと絡め、遊びの中の学びを多様に発展させる。プロセスで生じる様々な葛藤を成長の機会として取り上げ、個や集団に投げかけ、身近で具体的な出来事を通して課題を解決する力を培う。

幼児教育を取り巻く状況は大きく動いており、幼 児教育の無償化の流れ等と同時に、幼児教育に大き な責任を投げかけている。新幼稚園教育要領で示さ

#### 内容

巻頭言 (1)

スタッフ 自己紹介 (3)

院生 自己紹介 (6)

インターンシップ/木曜カンファレンス報告 (15) 6月ラウンドテーブル報告 (19)

スケジュール (24)

れた「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」 の意味を自覚し、小学校以降への接続を意識し、子 どもの今と将来の見通しを持って専門性を向上させ られるか。子どもの学びを核に、教員同士が力を合 わせ、時代のニーズに合う挑戦を続けられるか。保 護者・地域、幼児教育関係者、自治体等との連携を 強化し、実践・研究を広く役立てようとする公共性・ 公益性を生み出しているか。-4月の附属幼稚園着 任以来、幼稚園と小学校、行政を経験する自分がで きることは何かと自問自答する日々である。幼稚 園・小学校両方の世界を、担任として、研究主任と して、管理職として見つめ、県教育委員会で組織マ ネジメントの重要性を知り、大学で時代の流れと教 育改革が複雑に絡むことに気付く。「県幼児教育支 援センター、基礎自治体、多様な園との結びつきが 円滑であること」「幼児教育アドバイザー養成研修 とのコラボレーション、私立園の参加率の高さ等、 本園の取組が教員研修の機会として自治体・現場で 活用されていること」「地域の方々の参画を得て、 国立大学附属としての預かり保育に踏み出したこと」 等が糸口となるであろう。一歩ずつ取組の充実を図 り、子ども・教員のための「かけがえのないモデル 園」となれるよう、挑戦と伝統を併せもつ園経営を 実現させていきたい。











# スタッフ 自己紹介

# 学び続ける教師の姿を求めて ~教育・研究に関する抱負~

#### 柳 博恵 やなぎ ひろえ



教職大学院には、これからの 若い世代の教員を養成する「授 業研究・教職専門性開発コース」、 現職教員を対象とした学校での 核となる教員を養成する「ミド ルリーダー養成コース」、改革

期の学校を支える管理職のための「学校改革マネジメントコース」の三つのコースがあり、世代を超えて学び合うことができます。ここでの私の抱負は二つあります。

一つ目は、所属するコースを超え、大学院生と教 員の話をしっかり聴くこと「語りと傾聴」を大切に して、どういうところに力を入れていくと良いのか を示唆していきたいです。

二つ目は、私は附属学校に所属しているので、公立学校との橋渡しの役割を担っていきたいです。

これら二つの抱負を具現化するために、附属学園 や地域の小・中・高校の現職教員と協働して、実践 的な研究、活動のプロジェクトであることを理解し、 様々な方と一緒に取り組む空気を醸成していきたい です。

私は、平成二十六年度福井大学大学院教育学研究 科教職開発専攻において、スクールリーダーとして の資質や学校の組織力の向上をはかる研修を積みま した。対話の大切さから人間関係づくりやコミュニ ティづくりなど「チーム学校」としての運営の在り 方を考えることができました。また、福井大学主催 「実践研究福井ラウンドテーブル」に、毎年参加し、 自身の実践発表を重ねたり、学校関係以外の職種の 方の実践を聞いたりして、教育現場でも生きる学習 支援の方策や課題についてじっくり学ぶ機会を得る ことで、日々の実践に生かしています。

さて、子どもたちが自主的に学び合い成長できる 学校教育の実現には、子ども一人一人の学びと協働 を支える教員の力量と実践力が不可欠です。そのた めにも、各々の実践研究を共有しながら、高度な専 門的能力と優れた資質を有し、学び続けることので きる教員の養成を目指していくことを常に心に留め、 自分だったら何ができるのか、どのように進めてい くと良いのかを模索しています。

教職大学院では、『大学院生は拠点校のサイクルに合わせた長期のインターンシップを行う。現職教員の大学院生と共に、学校が抱える課題に協働して取り組むことで、教員としての実践力やマネジメントカ、専門職としての技量を培う。』ということを目指しています。このように、世代を超えて学び合うところの良さや、学びの価値を見いだしていきたいです。

また、「生きる力」を子どもたちに身につけさせる上で求められるのは、「自ら課題を見つけ、仲間と協働し、よりよい解決方法を探り、課題を解明していこうと主体的に学び続ける子どもを育てること」です。さらに、子どもたちが探究活動を行っていく中で、より質の高い学びを生むためには、コミュニティの存在が必要不可欠となってきます。仲間と協働で取り組むことを通して、自分の思いや考えを自

分の言葉で表現すること、また、他とのかかわりに よって自分の考えを捉え直し、さらに考えを広げた り深めたりすることが重要となります。

したがって、知識や考え方を一斉に指導するような授業ではなく、子ども同士の学び合いが協働的な学びにつながるような授業や、子どもたち自身が、自分の学びを実感し、将来、自分自身のどのような力につながっていくのかを構想することができるような授業が求められています。

附属学校がずっと大切にしている「探究」と「コミュニケーション」は、まさにこの「生きる力」を 着実に育む鍵と言えるものであると考えています。

附属学校では、授業実践や部会、研究企画、教育 実践研究会を通して、「実践を共有し、省察するこ とで教師の力量を形成していく」ことや「教師同士 が互いに実践を聴き合うことにより、視野が広がり、 思考が深まる」ことを実感しています。そこで、若 手教員だけでなく、学校全体としての力量形成のた めの指導と支援の充実を図りたいと考えます。まず、 将来を担う子どもたちの育成に必要な教科指導や生 徒指導に生かせる教員のニーズに応じた支援や方策 を工夫します。そして、授業を見る力、授業を組み 立てる力をつけるために授業公開の必要性を伝え、 相互評価により力量を高めていくことなどを、語り 合いながら共有していきたいです。

『「教える専門家」から「学ぶことの専門家」へと、教師に求められる資質は変化していることを肌で感じている。時代に応じて学ぶべき事柄は急速に変化し、情報が氾濫する中で何が学ぶに値するのかを吟味していくことや、多様な視点からことがらを推理したりとらえることが要求されるようになってきている。知識基盤社会と言われる時代には、決まったことを暗記するだけではなく、新たなものごとを協働でつくりだし、課題を自ら発見し、解決を創造していく力を培うことも求められている。』と秋田喜代美先生の著書に書かれているように、今、教師である私たちが、未来を生きる子どもたちのために、何が必要でどうすると良いのかをしっかりと捉え、実践していかなければならないと強く感じでいます。

教職大学院で学ぶ機会を頂いたことに感謝し、子 どもの主体的な学びを支える教師の姿を、そして実 践を省察し、経験の意味を問い直し、情熱と使命感 をもって、共に学び続ける教師でありたいです。



#### 栃川 正樹 とちかわ まさき

6月1日付けで福井大学連 合教職大学院准教授として着 任しました栃川正樹と申しま す。また、福井大学教育学部

附属義務教育学校教諭の兼任も賜りました。普段は、 附属義務教育学校前期課程の教務主任として、主に 教育課程や学校行事の調整、教育実習担当等の仕事 させていただいております。過日は、准教授着任後 初めて、コラボレーションホールで行われる FD と いう会議に出席させていただきました。私は、20 15年に、本校教職大学院を修了させていただいて おり、会議におられる先生方の中には、その当時お 世話になった恩師も数多くおられ、不思議な気持ち でした。また、初めてにもかかわらず、その会議に自然な形で参加することができたのも、教職大学院の先生方の温かな雰囲気のおかげだと感謝しています。その会では、「教師教育研究」という研究レポートの検討に参加いたしました。実践研究のプロセスをお聞きすることで、大学の先生方自身も学び続ける教師集団であることを再確認いたしました。後半は、ラウンドテーブルの運営についての打合会が開かれました。院生として参加していたときには、存じ上げなかった先生方のご苦労も垣間見ることができました。

6月23日・24日に行われたラウンドテーブルでは、有意義な時間を過ごすことができました。現

在、学校現場で課題となっていることに対する、ヒントがもらえ、帰りには心地よい気持ちになりました。大学院生時代に味わった感覚が、立場が変わった今でも変わらないことに嬉しさを感じました。学校では、教職専門性開発コースの院生(インターン生)の指導的な役割も与えられています。1ヶ月に1回程度、自主的にインターン会議を開き、インターン生が学校生活でかかえる課題などについて話をしていましたが、6月から私の立場が変わることで、院生との距離感が変わることを危惧していました。しかし、今回のラウンドテーブルで、いろいろな方々と話し合う中で、本校の院生であったことを強みに、同じ実践コミュニティの一員だという認識さえもっていれば、大丈夫ではないかという気持ちになりました。

さて、昨年度、附属小学校と附属中学校は附属義務教育学校になりました。現在、前期課程と後期課程が、連携しながら9ヵ年の学びをどのようにつないでいくのかを大切にしながら教育計画を立てています。例えば、それぞれの学校行事の連携の在り方や前期課程と後期課程の教員が、互いの課程の授業に乗り入れるための時間割の調整などです。今年度からは、さらに5・6年生に教科担任制が導入され、時間割作成には時間がかかりましたが、その労力以上に、児童にとっては、より専門的な知識や技能をもたれた教員からの授業が受けられるという利点が感じられます。また、時間割上に同じ専門教

科の教員(前期課程・後期課程)が一緒に話し合う 教科会を設け、9ヵ年を見通した各課程の授業のあ り方や公開授業の指導案検討など、情報交換する時 間になっています。私の所属する理科教科会では、 7月までに、それぞれの学年が生命分野の単元を配 置し、生命分野をそろえることで、異学年とのつな がりを見いだし、自分たちの学んでいる学習内容を 系統的な視点で見る場を設定することにしました。 4年生と7年生、5年生と9年生、6年生と8年生 という前期課程・後期課程の異学年をペアにして、 「理科子どもラウンドテーブル」を開催し、お互い 対話できる機会をもつことにしました。授業で学ん できたことを、フリップやレポートにまとめ発表す るだけでなく、同じ生命分野を学習した後期課程の コミュニティと意見交換をすることで、新しい知識 を得るとともに、児童の知的好奇心が高まることを 期待しています。

「学び合う実践コミュニティをコーディネートする」これは、私が2015年度に書いた長期実践報告書のテーマです。「教職大学院と附属義務教育学校」「メンターとインターン」「前期課程と後期課程の教員や児童・生徒」など様々な実践コミュニティをつなぐことが、私の一番の役割ととらえ、これからも理論と実践を往還しながら、皆さんと共に学んでいきたいと思います。どうぞ、これからよろしくお願いいたします。

# 院生 自己紹介



#### 室谷 知徳 むろや とものり

これまで、小学校16年間、中学校9年間勤務してきました。 そのうち24年間は、体育・保健体育主任を歴任し、勤務校において、児童・生徒の体力つくりに努めてきました。しかしながら、学校組織運営においては、

体力つくりや生徒指導面で微力ながら尽力した程度 に過ぎず、学校全体をマネジメントする教育実践の 経験は恥ずかしながら乏しい経歴でしかありません。

これまでの25年間、学級担任や学年主任、部活動顧問として大切にしてきたことは、「師弟同行」「凡事徹底」「face to face」です。児童・生徒との時間をできるだけ共有し、喜怒哀楽を共にすること、当たり前のことを確実に行うこと、保護者への連絡は、電話や連絡帳だけではなく、家庭訪問等で面と向かって行うことを心掛けてきました。児童・生徒理解、保護者との信頼関係の構築・維持が、学級運営、学年運営、部活動運営の根底にあってこそうまくいくものであると考えています。

現在は、越前市神山小学校勤務2年目を迎え、本年度より教務主任・研究主任を務めております。越前市教育振興ビジョンの中で、「地域と協働した学校づくりの推進」が人間力を高める教育の充実の柱の一つに掲げられており、本校においても、登下校時の子供見守り活動、読み聞かせ、水田での餅米つくり等で地域人材を活用しています。しかしながら、それらの活動は単発的であり、計画性・系統性・発展性に欠けているのが実状です。前年度には、地域の伝統的工芸の一つである瓦の製法を用いた焼き物作りを6年生で行い、手作りの苔玉をのせて地域の

地産地消の店で販売を行うという、地域との協働の 試みを新たに行い、保護者や地域の方々から大変好 評を得ました。まだまだ地域の宝(自然・産業・文 化・人材等) は眠っていると感じているので、それ らを再発掘し、教育に生かす新たな取り組みを模索 している段階であります。各学校では地域との協働 が求められ、その活動において中核となる教員が必 要とされています。そこで、本大学院での研修・研 究を通して、地域・学校との連携をさらに強め、教 職員が同じ方向を向いて子供たちの教育を充実させ るために組織的に対応できるようマネジメントする 能力を身につけていきたいと考えています。しかし ながら、学校組織全体の総合力を一層高めていくこ とが大切である一方で、教員の多忙化も大きく取り 上げられています。チームをつくることにより、他 の教員の多忙化がますます進行することのないよう、 できるだけ既存の組織を活用・発展することで、負 担が少なくなるようマネジメントしていきたいと考 えています。

教職大学院で学ぶことのできるもう一つの喜びは、 異校種・異年齢の先生方と、同じ目標に向かって研 鑽に励むことができるということです。自分自身は、 福井県外で生活したことがなく、まさしく「井の中 の蛙」でしかありません。さらに、3年間の鯖丹地 区の中学校勤務以外は、すべて南越地区の小中学校 勤務しか経験がなく、視野の狭い人間でもあります。 この福井大学教職大学院での2年間、多様な実践と 省察との出会いのみならず、人との出会いも大切に し、今後の教育活動で生かせるネットワークの拡大 を図っていきたいと思っています。2年間、どうぞ よろしくお願いいたします。



#### 石垣 治彦 いしがき はるひこ

今年度より、学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました。よろしくお願いいたします。現在、岐阜県羽島市立中島小学校の教務主任として勤

務して4年目となります。小規模校なので、学力向 上推進教師と初任者校内指導員も兼務しております。 これまで、主に岐阜地区の小中学校に赴任してき ました。岐阜市立長良小学校勤務時代には、教育活 動全体や国語科の授業を通して「子供と真剣に向き 合い教育をする大切さ」と「児童が物語文を読む際 の思考の流れや指導法」を研修・研究してきました。

また,「岐阜県小中学校教育研究会 小学校国語 科研究部会」の主務者として,県内の国語科教育を リードしてきました。

勤務する中島小学校は、木曽三川の1つ木曽川下流の右岸に立地し、自然豊かな土地にあります。また、東海道新幹線「岐阜羽島駅」・名神高速道路「岐阜羽島インター」も近くにあり、交通の便も大変よい場所です。

全校児童は、229人と羽島市内では小規模校になります。子供たちは素直で元気に毎日を過ごしています。

福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合 教職大学院で学ぶきっかけは、「福井県の教育を学 び、岐阜県と羽島市の教育に役立てたい」と思った からです。

岐阜県の「学力向上推進会議」では、よく福井県 の学力学習状況調査との比較資料が提示され、私た ちの指導改善を図るように通達されます。

しかし、こうした会議では、「福井教育の結果の素晴らしさ」を知ることはできても、実際に「福井県でどのような教育が行われ」、「子供にどのような指導をされているのか」「先生は何を大切にして指導をしているのか」「校内研修組織」等を知ることはできません。

前任校に引き続き、学力向上推進教師の分掌を任されて7年目になりますが、福井教育の素晴らしさを探ろうと、始めは、ネットで福井県の使用教科書等を調べる等、自分なりに「福井教育」の情報を集めました。

しかし、ネット等では、知ることができる情報も 限られてきます。

そんなとき、校長会で「連合教職大学院」の案内が紹介されました。校長先生が私に案内を見せながら、「現職のまま大学院へ行けるよ。石垣先生、考えてみてはどう。」と助言していただきました。

家に帰り、妻と2人の子供に「教職大学院に行き たいんだけれど!それも、福井大学、できたら行き たいんだけど!家族の意見はどう?」と伝えました。

家族は、快く OK をしてくれました。しかし、「妻と子供は、福井に行って遊べる。」「魚がうまいぞ!」と、「父が学んでいる間に、福井県の観光ができる!」という「OK!」でした。

こうして, 私が「教職大学院で学ぶ準備」ができました。

年が明け、校長先生が、教育委員会へ働きかけて くださり、受験の許可が下りました。さらに、教育 委員会の方も受験を応援してくださいました。こう して私の「福井教育のよさを思いっきり吸収する準 備」ができました。

さらに,連合教職大学院で学ぶ際,岐阜聖徳学園 大学の担当が,柘植良雄先生であることに大変驚き ました。

柘植先生は、岐阜県の小学校では5つしかない研修校の1つ「加納小学校」で長年子供と職員を指導されてきました。私も柘植先生が、加納小で校長をされているちょうどその時、研修校の1つ「長良小学校」で教員として研修をしていたのです。

加納小が岐阜県の教育をリードしてきたことは、前回の教職大学院「Newsletter No. 111」でご存知かと思います。柘植先生に比べると、ほんのわずかの期間ですが、長良小で研修した私が、加納小の偉大な柘植先生の下で2年間指導していただけることは、なにものにも代え難い日々になります。岐阜県の教員はうらやましく感じることと思います。

話が長くなりましたが、岐阜県の管理職に求められる能力の1番目が、「業務のスリム化を断行できる人物」となりました。

現任校では、小林校長先生の指導の下、教師の意 識改革が図られています。「昨年度の踏襲は後退で ある」「当たり前のことを考え直す」「それって本 当に必要?」等です。

岐阜県の教員は、福井県の教員と同じく真面目で す。子供のためなら、夜遅くまで学校に残り仕事を する教員がほとんどです。

しかし,福井県ほど成果が上がっていないのが現状です。きっと,福井県の学校にはあり,岐阜県の学校にはないものがあるのかもしれません。

今回大学院で学ぶに当たり、言葉は悪いかもしれませんが、「福井教育のよさを盗み、岐阜県に持ち帰り、岐阜県で実践し、成果をあげること」が1番の目標です。

教師にとって「分かりやすい授業を行うこと」は、 最低限の職務です。それを、「いかに効率よく行い」、 かつ「子供に学力が付くためには」、「どのような ことが必要なのか」を真剣に学べる2年間にしたい です。

そこで、「総合的な学習の時間を核としたカリキュラムマネジメント」を行ない、指導内容の重点化と学校目標達成のための、適正かつ効率的な学校行事の配置に取り組みたいと思います。

最後になりますが、羽島市の学校から、福井の連合教職大学院で学ぶ第1号となります。羽島市からは、来年から1名ずつ連合教職大学院へ派遣する話

も聞きました。今後学ぶ後輩のためにも、精一杯学 びます。

いろいろご迷惑をおかけするとは思いますが, 諸 先生方のお力を借りながら, 自分を高めるため, 岐 阜県・羽島市のため、そして未来を担う子供たちの ために、福井の学校の素晴らしさを学び、自らの実 践と照らし合わせて、一歩一歩成長してきたいです。 よろしくお願いいたします。



#### 今澤 泰秀 いまざわ たいしゅう

今年度から、学校改革マネジメントコースで学び始めた 福井県立丸岡高等学校の今澤 泰秀です。

丸岡高校では、この4月から学校改革プロジェクトに取組んでおり、私はプロジェクトの一つである「授業改善」に関するプロジェクトのリーダーを務めております。2年後に実施が始まる大学入学共通テストや平成34年度から年次進行で実施される次期学習指導要領を見据え、「主体的・対話的で深い学び」を提供できる授業に進化させるための取組を始めています。これまで私が経験してきた研究や取組は、短期的あるいは取組のための取組といったものが多かったのが現状でしたので、ともすると今回の取組もそうなってしまうのではないかと思い、この教職大学院に学ぶことを決めました。

入学してからまだ4ヶ月程ですが、カンファレンスで得た情報やヒントを基に自身でもよく考え、プロジェクトチーム(授業力向上チーム)の仲間と共に次のような取組を進めてきました。

4月:授業力向上チーム編成

5月:職員研修会の実施

教職大学院の教授陣をお招きし全国の高校入試問題を題材にカンファレンスを実施しました。

6月:5教科指導主事訪問

県教委の事業に参加し、5教科の教員全員の授業 を参観してもらってコメントを頂きました。

7月:評価に関する研修会

先ずプロジェクトチーム内で実施し各教科会で伝 達講習を行いました。

今後の流れについてもプロジェクトチームで知恵 を出し合いながら進めていく予定です。

ところで、この夏の集中講座で読んだ「長期実践 記録」や「コミュニティ・オブ・プラクティス」は、 とても参考になりました。そこで、早速プロジェク トチームに提案し、希望者を募って2学期から実施 する予定であった授業改善に関する「研究会」を「勉 強会」変更して実施することにしました。参加者が 対等な立場で意見を交換し互いに学び合える場、今 頃こんなことを聞いたらバカにされるかな?と思え るような疑問でも臆面なく質問できる場にしたいと 考えたからです。そしてそれをコアにしたコミュニ ティが作れないか、理論と実践の両輪で模索してい きたいと考えております。うまくいくことは稀で、 失敗することの方が多いのかも知れませんが、その 時々においてプロジェクトチームの仲間や教職大学 院の力を借りて修正を加えながら一歩ずつ着実に改 革を進めていきたいと思います。この2年間は、あ っという間の2年間になりそうです。



#### 小島 義和 こじま よしかず

平成元年、4月1日。消費税のスタートと同時に教員人生をスタートしました。まさか、小島が先生になるとは!と、周囲の友人から、そしてあろうことか恩師までがまさかと言わ

れるような"私"でした。そして今年度4月、まさか小島が教頭に!と、保護者になった教え子達から言われました。そしてまさか、小島がかつて入試で不合格となり、30代では半年間内地留学でお世話になった福井大学に、再び大学院生として通うことに

なる!本当に人生は不思議だなと感じます。私以上に不思議なのは、世の中の変化です。まさか、共にスタートした消費税が3倍以上の10パーセントにまで伸びようとすることになるとは、まさか、平成が自分の教員人生よりも短命に終わろうとは、まさか、IT 革命と言われ始めて以降、ここまで社会が急速に変化していくとは…。

さて、実は大学院を受験した頃は疑問を感じていた「主体的、対話的で深い学び」の具現化を中心に、 新指導要領の目指すところへ現場でいかに舵を切っ ていくかということのみを学んでいこうとしていま した。ところが、新教頭として赴任した敦賀北小学校は、平成元年からの9年間と、昨年1年間お世話になった角鹿中学校と3年後の○○3年4月に「施設一体型小中一貫校」として生まれ変わる学校です。「設立準備委員」の「認証状」を渡されたときには

「設立準備委員」の「認証状」を渡されたときには「先生には3年間がっちりお世話になります…」と市の方に軽く言われて「やっぱり?!」と感じた私でした。そんな中でスタートした大学院では、「小中一貫校」をいかにスタートさせるかを軸に、何を考え、どうマネジメントしていけばよいかを探求することが、自分の学びの課題となっています。

「準備のみに関わる」経験は、今後勤務するであ ろう学校が、施設一体の一貫校ではない中で、「小 中一貫の枠組みをいかにマネジメントするのか」を 実践していくのかにつなげられる経験とできるはずです。逆にできあがってしまった一貫校に赴任する こと以上の貴重な経験とも考えられます。とはいえ、 貴重である=前人未踏に近い、他では経験しない+  $\alpha$ の仕事であり、自分にどこまでできるかは極めて 難しいことです。だからこそ、この大学の2年間で、 あらゆる「つながり」と「実践コミュニティ」の種 をどんどんと増やし、糧にしていきたいと考えてい ます。そして、私の経験が、またどこかで誰かの役 に立ててもらえるものになればと思います。みなさ ま、どうぞよろしくお願いいたします。

#### 田結 清高 たゆい きよたか

2018年度4月より、学校改革マネジメントコースで学んでいる田結清高です。入学から3ヶ月。月間カンファレンスやラウンドテーブルを通じて、教職大

学院の先生方はじめ多くの教育関係者と交流する中で、たくさんの学びや刺激をいただいております。

私は現在、小浜市にある嶺南教育事務所研修課に 勤めており、主に初任者研修や嶺南教育実践フォー ラム(2月14日実施予定。ご参加お待ちしております!)、ICT 研修などの企画運営を担当しています。

私の勤務する嶺南教育事務所は、総務課、特別支援教育課、指導相談課、研修課の 4 課で構成されており、それぞれの課が 1 つの機関といっても過言ではないくらい多様な業務を行っています。その中で、私の所属する研修課は、初任者研修や中堅教諭等資質向上研修など県の教員研修体系上に位置する教員研修に加え、教科や領域に関する専門研修を企画運営している部署です。学校現場が夏季休業中であるこの時期、私たち研修課にとっては、昨年度から企画を進めてきた研修の実施が連続する多忙期にあたり、準備と運営に追われる毎日を過ごしています。

私は教職大学院生ということで、所内の協働研究会も企画運営しています。協働研究会は、全所員が一堂に会して行う研究会です。今年度はすでに 2 回実施し、所内事業の共有や嶺南教育実践フォーラムについての意見交流などを行いました。教職大学院の先生方が遠路はるばる来所され、研究会への参加および院生である私へのカンファレンスを行ってくださいました。職場に居ながらにしてこのような学

びの機会を得られることは本当に有り難いことであ り、大変感謝しております。

私の現場での経験は、小学校 10 年、中学校 10 年 でちょうど半々になります。そのほとんどを学級担 任として過ごしてきました。小学校では、専門教科 である算数の授業づくりや校務分掌で任されること の多かった視聴覚・ICT を取り入れた授業づくりを 中心に取り組みました。中学校では、学年で取り組 む特別活動や総合的な学習の企画、部活動指導など 目前の仕事をこなすのに精一杯な毎日でした。

そのような折、勤務していた中学校が県のコアティーチャー事業の指定を受け、コアティーチャーとして 2 年間、教科の研究を進める機会をいただきました。5 人の数学教員が、それぞれ年 1 回の公開授業を受け持ち、各授業に対して事前と事後の研究会を行う計画を立てて実践していきました。研究会には毎回のように、嶺南教育事務所の指導主事が助言者として遠方から参加してくださいました。(この時から嶺南教育事務所とはご縁があったのだなと思います。)今になって考えてみると、この時の学びが、現在在籍している教職大学院の学びとシンクロしていることに気がつきました。私は、このコアティーチャー事業の成果を次のようにまとめています。

『5 回の授業研究会とその指導案検討会を実施した。5人の教員が、授業についてこれだけの時間を共有すること自体が貴重な機会となった。また、指導主事や授業の参観者からの適切な助言もあり、一人ひとりが教材観、指導観を深めることができた。さらに、高校からの授業参観者もあり、中高連携の視点から相互の指導観、教材観を深める機会にも恵まれた。』

学校を拠点とした学びのコミュニティづくりが教員の資質向上に非常に有効に作用するということについて実感をもって述べている自分を再発見したことは、とても興味深い経験になりました。私にとって教職大学院で過ごす時間もそれ自体が貴重な機会

になることは疑いのないことであり、胸の高まる思いがしています。実践を通して自分なりのリーダー像を確立し、マネジメントを着実に実行していける視野の広さと地力を養っていきたいと考えています。 2年間、どうぞよろしくお願いします。

#### 藤野 秀樹 ふじの ひでき



今年度、学校改革マネジメントコースに入学しました藤野秀樹と申します。どうぞよろしくお願いします。教職について30年目。ずっと小学校に勤務しています。

私が現在勤務している長畝(のうね)小学校は、 坂井市丸岡町、現存する日本最古の天守閣をもつ丸 岡城の東側にあります。本年度の児童数は310名 【15クラス(各学年2クラスと特別支援学級3ク ラス】)の学校です。ほとんどの児童が落ち着いて 学校生活を送っていて、運動会や長畝っ子集会等を 通して、縦割り班活動を積極的に行っており、学年 間の交流も多い学校です。

また、保護者や地域の方々の学校教育活動への関心は高く、協力的です。運動会や学校開放日をはじめとするさまざまな行事への参加・協力や「読み聞かせ」、登下校の「見守り隊」など、「地域で子どもを育てる」という意識が高い地域です。また、地域の団体である「のうねの郷づくり推進協議会」がさまざまな事業を行い、学校や PTA との連携を図っています。

そんな恵まれた長畝小学校に勤務して6年目になります。その間、担任及び生徒指導主事として2年間、そして教務主任として3年間勤務してきました。今年で教務主任4年目になります。学校教育目標の「自ら学び たくましく生きる 心豊かな児童の育

成」を目指して、学校運営に参画しています。特に 教務主任としては、以下の3点を特に意識していま す。

- ①同僚とのコミュニケーションを積極的にとり、 若手教員に学習指導及び学級経営について助言 をすること。
- ②担任が子どもたちと向き合う時間を少しでも多くできるように、事務処理の時間短縮を 図ること
- ③保護者や地域とのネットワークを築き、信頼される学校づくりの一翼を担うこと。

さて、今年度より2年間、教職大学院で学ぶ機会をいただきました。4月からのカンファレンスやラウンドテーブルで、いろいろな方と出会い、一線を語り合う中で、教員間の研修体制づくりのヒントをいただくことができました。さらに、勤務する長畝小学校が、人的・物的な教育資源に恵まれた学校をあることを実感しています。そんな長畝小学校を、さらに「児童も教職員も通うのが楽しくなる学校」にしていくために、今以上に教職員の協働体制を意識して積極的に学校運営に参画していく必要があると考えています。そのために、教職大学院で学が、自分の物の見方や考え方を広げ、その学びを生かして、継続的な学校改革に貢献していけるように研究に取り組んでいきたいと考えています。どうぞよろしくお願いします。



#### 濱辺 直美 はまべ なおみ

本年度より学校改革マネジメントコースに入学いたしました 濱辺直美です。どうぞよろしく お願いいたします。坂井市三国 町の雄島小学校に勤務しており ます これまで、中学校で2年間、小学校で26年間の 教員生活を送ってきました。そのほとんどを学級担 任として児童に向き合い、学習・生活両面から児童 の成長のために、多角的、多面的に指導方法を研究 してきました。

大関小学校に勤務していたときには、学力向上フロンティア事業に関わらせていただき、授業にチー

ムで取り組む経験をさせていただきました。また、 丸岡中学校・芦原小学校・大関小学校に勤務してい たときには、専門である音楽の実践研究の機会にも 恵まれ、全国研究大会の推進委員として取り組んだ り、その後の福井県での研究発表に関わったりして いきました。最近では、道徳、英語などの研究発表 の場を与えていただきました。これらの経験は、手 ごたえがあって満足のいくものが多かったのですが、 反対に、思い通りに行かなかったり、また改善点や 課題が見つかったりして、さらに研究を推進すべき ことがまだまだあると反省させられることもありま した。今の教員としての自分にはまさに財産であり、 これからも大事にしていきたいことばかりです。

現在の職場では、5年生を担任しながら、研究・学習指導主任として、校内研究を推進していく立場にあります。今年度は、「考え、議論する道徳科を目指した指導と評価の工夫」を研究主題として、全職員が1人1授業研究を行い、その授業を参観することになっています。さまざまな行事がある忙しい中で、どのような取り組みをしていくか、また道徳

科の授業研究が、児童・職員全員に、実のあるものになるようにどうアプローチするか、など課題は山積みです。教職大学院への進学を機に、最近は、職員が主体的に研究に取り組んでいくように自分自身がどう動けばいいのか、ということを考えるようになりました。より良い方向へ行きたいという願いは誰しもが持っていると思うので、全職員が納得できる校内研究になるように、働きかけていきたいと思っています。

これまで一担任として過ごしてきた自分が、学校職員のマネジメントを行うとは、どういうことなのか、まだあまり分かっていません。しかし、自分のことだけを考えるのではなく、学校全体を見て、学校全体が一つの目標に向かって動くように、全職員をマネジメントすることがより良い教育につながるのではないかと考え、その方法や対処の仕方を学んでいきたいと考えています。そして、これからの自分の立場に生かしていきたいと考えています。この2年間の学びを、これからの自分の教員生活に生かしていけるよう、進んでいきたいと思っています。



#### 織田 恭直 おだ やすなお

今年度,学校改革・マネジメントコースに入学しました,織田恭直と申します。 現在,美浜町立美浜中学校に勤務して2年目となりま

す。校内では第2学年主任と教職大学院入学と合わせて研究主任をさせていただいております。

本校の研究推進体制は、福井大学教職大学院の拠点校となった平成20年度に大きな転換を迎えています。その年、授業研究のスタイルが、専門教科による枠組みから、教科横断的な枠組みへと変更となりました。研究主題に基づいて公開された授業について、教科の枠を超えて組まれたグループに所属する教員が語り合うスタイルとなりました。こうした研究推進体制は、平成29年度末で10年を経過しました。

美浜町教育大綱の基本理念は「個性と能力を伸ば し 夢を実現する ひとづくり」です。その重点施 策の中に「いじめをなくす教育環境づくり」「学力・ 体力の向上」があげられています。美浜中学校の学 校教育目標は「確かな学力をつける 豊かな心情を 育てる 健康な心身を育てる」です。その具体的な 取組の中に「人を大切にし、認め合い励ましあう居 心地のよい学級・学校づくり」「学びあい高めあえる活動を意識した授業づくり」があげられています。

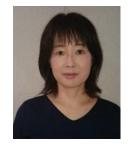
美浜町教育大綱および美浜中学校スクールプランの具現化に向けて、「『わかる』授業をめざした指導の工夫~ねらいに迫る明確な学習課題の提示を通して~」という、授業改善を柱とした研究主題を設定しました。なぜなら、そうした授業の中で集団づくりも進んでいくと考えるからです。

サブテーマにおいて,「わかる」の内容を「学習課題がわかる」ことと位置づけました。「明確な学習課題の提示」とは,この1時間で何を学べば学んだことになるのか,ねらいに迫る「めあて」をしっかりと示す手続きであり,子どもの学びをアクティブにするための第一の,そして最も重要な工夫とされています。その工夫は,子どもたちの協同学習を進めていくときのポイントです。「協同」とは「仲間全員の成長をめざすこと」と定義されています。よって協同学習では,子どもは仲間を高める意識と,仲間からの支援に誠実に応える意識が求められます。こうした協同学習の中で育成される集団,つまり個人差を認め合い,学び合い,高め合えるクラスは子どもたちにとって居心地の良い環境となります。

具体的な手立てとして、教材研究を進めて授業を 組み立てていくときに、本時のねらいに迫る適切な 課題を設定することに留意し、授業で板書等を通し て子どもたちにしっかりと提示していきます。そし て、その達成に向けてペア学習・グループ学習・一 斉学習等、互いの考えを認め合ったり、自分の考え を深化・拡充したりする場を適切に設定していきま す。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた 授業改善につなげるということを強く意識化するこ とをめざしています。

なお、取組の評価・改善の手立てとして、「魅力 ある学校づくり調査研究事業(国立教育政策研究所)」 の意識調査を利用することとしました。本校の研究 に合わせて「調査項目(エ)」の「授業がよくわか る」の内容を、「学習課題がよくわかった状態で授業に取り組めた」と具体化しました。4件法の「1. 当てはまる」を増加・維持させるために必要なことを探るとともに、「2. どちらかといえば、当てはまる。」の「どちらかといえば」の理由を記述する欄を設けることで、「どちらかといえば」を除くために必要な取組は何かをつかむ手立てとしていきたいと考えています。

これからの教職大学院での学びを、学校での教育 活動を通して子ども達に還元できるようにしていき たいと考えています。たくさんの人との出会いの中 で、語り合い、学び合ったことは、今後の教員生活 における財産となることと思います。よろしくお願 いいたします。



#### 山岸 美穂 やまぎしみほ

今年度学校改革マネジメントコースに入学しました山岸 美穂です。

私は、昨年度まで29年間、 中学校教員として勤務してき

ました。「小学校の先生になりたい」という夢を持っていましたが、採用されたのは敦賀市内の大規模中学校でした。1校目で6年間の勤務を終え、次こそは小学校に…と望みを抱いていましたが、2校目に赴任したのも中学校でした。

小学校教員への思いが叶わぬまま中学校勤務を 続けているうちに、だんだんと中学教師の魅力には まっている自分に気がつきました。疾風怒濤と言わ れる難しい時期にある中学生の指導ですから、大変 なこともたくさんありましたが、それでも、どんな ときも自分に正直で、まっすぐに向かってくる彼ら の純粋さに、はっと胸を打たれることが多くありま した。何より、彼らの持つパワーは素晴らしく、集 団が1つになったときには、こちらの予想を軽々と 超えてしまうような力を発揮するのです。私は、彼 らの指導に苦心すると同時に、彼ら自身に幾度とな く救われ、深い感動をもらいました。ずっと抱いて いた「中学校なんていやだ」という思いは、気がつ けば「中学教師こそ私の天職」と感じるほどに変わ っていったのです。

また、個性豊かなたくさんの先生方と出会いました。教科の高い専門性を持ちながら部活動の指導もする中学教員は、人間的な幅も広くて魅力的です。 部活動のブラック化が指摘されていますが、部活の 指導がしたくて中学教師になった先生も多くいて、 その熱意には頭が下がります。難しい時期の生徒を 育てていくために、互いの仕事を尊重しつつ、足り ないところを助け合う、そんなチームワークが中学 校には根付いています。私は中学校で、素敵な先輩 方に出会って、こんな先生になりたいという目標を 持ち、また熱意溢れる若手に出会って刺激をもらい、 教師としてはもちろん、人間としても成長させても らいました。

中学教師としてそんな29年間を過ごしてきた私 が、今年4月教頭に任用され、敦賀市立東浦小学校 に勤めるようになりました。初めての小学校、しか も、担任から教頭へ。ここで、私がなぜ教職大学院 で学ぶことを選んだか、その理由が分かっていただ けると思います。中学担任として29年間過ごして きた私には、管理職としての知識や経験が圧倒的に 不足している、勉強しなければならない、そう痛切 に感じたからです。しかし、実際に大学院に通って みると、知識を教えてくれる場所ではないことが分 かりました。理論書を読み、自分の実践と重ね合わ せることで、その実践を理論に基づいた確かなもの へと強化していく。そして、グループで自分の学び を語り、メンバーの学びを聴く中で、新たな学びを 獲得していく。まさしく「主体的・対話的」なサイ クルを繰り返す「深い学び」であることが分かって きました。講義に出て聞いていればよかった私たち の時代とは違うのだ、大学も変わろうとしているの だと実感しています。

夏休みの集中講座期間は、キャンパス内に現役の 大学生がたくさんいて、自分も学生時代に戻ったよ うな若々しい気分を味わっています。朝6時前に出 勤して、机上に積み上げられた文書を処理してから 大学に来るというハードな生活、勤務校の先生方と たまに会えると「教頭先生久しぶり!」と珍しがら れるような生活ですが、学ぶことは楽しいです。私 は意外に勉強が好きなのかもしれないと新たな発 見もしています。

東浦小・中学校は、南越前町と敦賀の山間にある 小さな小中併設校です。全校児童生徒が33人、職 員が18人のとてもアットホームな学校です。特産 物のみかんを育てながら、住民と一体になって地域 の活性化に励んでいます。校庭にもみかんの木があ って、みかんの季節になると、毎回給食にみかんが つくそうです。近くにお見えのときは、ぜひ東浦小学校にもお越しください。おいしいみかんをご馳走します。私はここで、新米教頭として悪戦苦闘しながら、小学校3年生と中学校3年生の国語の授業を持たせてもらっています。教頭職に就きながらも、かろうじて中学教師の範疇に足を入れたまま、ずっと憧れていた小学校の先生にも挑戦しているというわけです。自分の人生はこの先どうなるのか不安もありますが、かつて思いがけず中学教師になったときに、日々の実践の中で発見を重ねて新たな視点を見出したように、今回もきっと道を切り拓いていける、そう信じています。そのために、職場の先生方や子どもたち、大学院で出会う先生方や仲間たちから学ぶ姿勢を大切にしていきたいです。どうぞよろしくお願いいたします。



#### 小坂 恵 こさか めぐみ

今年度、学校改革マネジメントコースに入学しました、 小浜市立小浜小学校の小坂恵 です。本校は、JR 小浜駅から 徒歩 10 分に立地し、明治時代

の芝居小屋を移築復元した「旭座」が校区にあるなど恵まれた環境にあります。地域の方の応援を受け、地元の海を泳いで気力と体力を養う遠泳大会は、今年度で40回目を迎えました。このような特色ある地域資源を活かしながら263名の児童と27名の職員が力を合わせて目標に向かって取り組んでいます。

さて、私は福井大学教育学部養護学校教員養成課 程を卒業後、名田庄村(現おおい町)や小浜市内の 小中学校に勤務し、教職24年目を迎えました。今年 度も含め、この24年のうちの18年間は、特別支援 学級の担任をさせていただいています。そもそも特 別支援教育に興味を持ったのは、高校生の頃に遡り ます。どういったいきさつだったのか、特別支援学 校の授業を見学する機会がありました。何気なく参 加したそこで、私はある場面に胸打たれ、特別支援 教育の方に進みたいとの思いを強くしました。その 場面とは、常時、杖で移動している生徒が階段を一 日一歩昇る練習をしている場面でした。担任の先生 がおっしゃるには、「特にどれだけ練習するように 決めていないけれど、ときどき見ているだけでこの 子はがんばれるのです。」とのことでした。逃げよ うと思えば逃げられる環境の中、困難さを抱える生 徒が自らの意思で一歩一歩、歩みを進めているさまに、特別支援教育のすばらしさを感じました。そして、その生徒の背景に、家族や友人、先生といった、がんばりを見ていてくれる人の存在を感じました。そういった人との良好な関係性が生徒を突き動かしているようにも感じました。困難さを乗り越えようとする心が「見ていてくれる人の存在」によって生まれるならば、自分がそういう存在になりたいと思ったものです。

あれから30年近くたち、このたび大学院で学ぶ機会をいただきました。4月以来「学校改革」「マネジメント」という言葉が、自身の視野の狭さや気弱さに突き刺さっているのですが、話を聴いてくださる先生方の存在によって、自分でも気づいていなかった思いに気づくことがあります。また、他校の先生方の実践や大学院の先生方の励ましの言葉に刺激を受け、やってみようという前向きな気持ちに灯がともされています。

教職大学院では、2年間で100人くらいの人と話すことができると伺いました。このことは、「見ていてくれる人の存在」を感じながら進むことに思えて、あのときの生徒の姿に重なります。着地点が見えず不安がありますが、縁あって県内外のすばらしい先生方に出会えた幸せをかみしめ、同志と感じられるような関係性をこの教職大学院で育んでいけるよう、自分を成長させていきたいと思います。皆さま、どうぞよろしくお願いします。

#### 寺前 公恵 てらまえ きみえ



今年度より、学校改革マネジメントコースに入学いたしました寺前公恵です。どうぞよろしくお願いいたします。

現在、福井市六条小学校に勤務しております。5年生を担任しており、専門教科は音楽です。六条小学校は、全校児童91名で、1学年1学級です。豊かな自然に恵まれ、近隣には県立図書館や市立美術館等があり、環境に恵まれたところです。地域の方達は大変温かく、あらゆる面で学校を支えてくださっており、家庭・地域と連携した取組を積極的に行っている学校です。

私は、平成15年に附属小学校(現在の福井大学 教育学部附属義務教育学校前期課程)に赴任し、6 年間所属しておりました。今回、教職大学院に入学 するお話をいただいた時、「自分にできるかな。」 という不安よりも、附属小時代の充実した思い出が よみがえり、期待感の方が大きかったように思いま す。学級経営方針として「子供達一人一人に居場所 がある温かな学級作り」とよく耳にしますが、教職 大学院は、「私たち教職員一人一人の思いを大切に しながら温かな居場所を与えてくださる場」だと、 この2か月間、とても実感しました。週末に6階の コラボレーションホールに来られることが楽しみで す。それもこれも、これまでお世話になった先生方 との懐かしい再会や、共に学ぶ学校改革マネジメン トコースの先生方との新しい出会いによるものです。 感謝の一言に尽きます。2年間で学んだことを、今 後の教育活動に生かしていけるよう頑張りたいと思 っております。

さて、なぜ附属小学校時代が楽しかったのかを少しお話してみたいと思います。その頃の校長先生は 寺岡英男先生でした。その頃の私は研究のことなど 全く興味もなく無縁なものでした。赴任した時は不 安と緊張から抜け出せず、会議で聞こえてくる言葉 はまるで宇宙語のようでした。専門教科である音楽 が大好きで教員になった私には、その重要性がわかるはずもなく、音楽の技能をどう教えるか、その手 法を知りたいという欲しかありませんでした。今でいう「深い学び」のための子供達へのアプローチが「遠回り」に思えて仕方がなかったのです。「待つ」という言葉にも違和感がありました。なぜなら「すぐに指導する」ことしかやっていなかったからです。

うまくいくと自分自身が勝手に思い込んでいるワン パターンの授業の形を確立しつつあり、「見せる授 業」がすでに自分の中でイメージできていました。 今思えば、その授業作りの中で、子供の姿は見えて いなかったのです。附属小学校での6年間は、それ までの教員生活の中で一番自分が変容したと思える 時期です。その背景には、多くの先生方のご助言が あります。そこから繰り返し実践する中で、「振り 返り、考え、実践する」ことをたえず行っていきま した。葛藤や迷い、喜びや達成感など、いろいろな 思いがそこにはあります。「先生方が協働し子供を 育成する」ことを身をもって学ばせていただきまし た。特に、寺岡英男先生や音楽教育の橋本達雄先生 には、大変お世話になりました。私たちの実践にじ っくりと耳を傾けてくださり、励ましてくださり、 意味づけしていただきました。研究にどっぷりと浸 り、とことん語り合うことができました。そういう 時間をいただけたことが、今となっては宝物です。 また、多くの大学院生ともかかわりましたが、自分 の大学時代とは似ても似つかず、しっかりと子供達 を見取り、自分の意見を会議の場で述べ、授業実践 にも積極的に取り組んでおりました。福井大学の教 育レベルの高さをまざまざと見せつけられたような 思いでした。

附属小学校から、順化小学校、そして現在、六条小学校に至ります。どちらも小規模校です。しかし、職員数が少ない中でも「協働体制」が成り立っております。教職大学院で学ばせていただいたことを、少しでも自校に持ち帰り、管理職の先生方にご指導をいただきながら、先生方を支えていけるよう、自己研鑽に努めていきたいと思っております。

授業作りに明け暮れた附属小学校時代から、今度 は学校全体をマネジメントすることについて学べる 機会ということで、これまでの経験や今の取組と照 らし合わせながら「学び直し」をさせていただきま す。今、子供達に求められている学び方を、私たち 教職員も主体的に仲間と行っていくことに期待しつ つ、これから2年間、自分の視野を広げ、一つ一つ 学んでいこうと思います。未来の子供達の幸せのた めに、これまでお世話になった先生方に恩返しでき るよう、頑張りたいと思っております。2年間、ど うぞよろしくお願いいたします。



#### 橋本 光一 はしもと こういち

2018年4月より学校改革 マネジメントコース入学しまし た橋本光一です。

私は、平成元年に福井大学教 育学部を卒業したので、30年

ぶりに福井大学で学ぶことになりました。専攻が理科だったので、主に2号館で学んでいましたが、当時とはだいぶ様子が変わっており、時の流れを感じています。1号館の方は、2号館よりも当時の面影を残しており、学生時代の懐かしい思い出がよみがえってきます。良き思い出のある福井大学で、再び学べることに感謝しています。

大学卒業後は、敦賀市の松原小学校で3年間勤務し、今は廃校となった愛発小中学校で8年間,東浦小中学校で4年間と小中併設校で勤務しました。当時はまだ自分の周りのことをしていれば良かったので、がむしゃらに突き進んでいた気がします。しかし、この間素晴らしい先輩方と出会い、また保護者の協力もあり、「学習指導」、「生徒指導」、「保護者・地域との連携」の基礎を学んだ気がします。また、小学校、中学校の連携と小中通して一貫して指導することについても学びました。今の私を支えてくれる経験を得た、非常に重要な期間でした。

その後は、栗野中学校で7年間、松陵中学校で7年間勤務し、生徒指導主事、学年主任をやらせてい

ただきました。この期間では、1学年6~7学級という大規模な組織の中で、チームとして取り組むことを学びました。学年主任を8年間させていただきましたが、学年を共通の目標に向かって、全員で取り組むことに気を配ってきました。

そして、今年度から新任教頭として赤崎小学校に 赴任しました。粟野中学校や松陵中学校等の大規模 校とは違い、全校児童数11名の非常に小さな学校 ですが、子供たちは元気一杯で、自然環境も素晴ら しく、非常に恵まれた環境です。赤崎小学校は、平 成33年度開校予定の小中一貫校「角鹿小中学校」 の校区にあり、現在、敦賀北小学校、咸新小学校、 角鹿中学校と共に一貫校設立に向けて取組を進めて います。4校それぞれに校風があり、伝統があり、 地域があります。それを生かしながら、小小連携、 小中連携を密に取り、小中一貫校への移行をスムー ズに行えるようにしていかなければなりません。教 職大学院では、共通の目標に向かって動かすための マネジメントのあり方について考え、「チームとし て」子供たちの育成にあたる学校をつくるためには どのように取り組んでいけば良いかについて、みな さんと共に学んでいきたいと思っています。どうぞ よろしくお願いいたします。

# インターンシップ/木曜カンファレンス報告

#### 自分にとって、子どもにとって

#### 授業研究・教職専門性開発コース1年/附属義務教育学校後期課程 澤崎 俊之

福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程でインターンシップをさせて頂き、早くも3ヶ月近くが経とうとしている。インターンシップの日々は私にとってカルチャーショックの連続であった。「主題一探究型の授業とは?」、「見取りとは?」などインターンシップを通して、初めて耳にしたり、目にしたりする言葉や出来事でいっぱいであった。このような刺激的なインターンシップの日々を過ごす中で私は学校における学びは「子どものためにある」と改めて実感した。そして、私は常にインターンシップにおける自分の言動は果たして「子どもにとっ

て」プラスなことなのかを考えるようになった。勿論、インターンシップの日々は「自分にとって」プラスなことばかりである。しかし、インターンシップの現場の"主役"である「子どもにとって」私の存在はどのような影響を与えているのかと悶々と考えるばかりである。

先日、単元での授業実践を行った時に後悔すべき ことがあった。それは教材研究を行い、授業の構想 を立てる段階から授業を「子どもにとって」面白い、 学びたいと思うような目線ではなく、「自分にとっ て」面白い、学びたいと思うような目線で取り組ん

でしまったことである。これまでのインターンシッ プの日々であれほど「子どもにとって」の目線で学 校における学びを考察し、学んできたはずであった。 しかし、私は「自分にとって面白い、学びたいこと」 と「子どもにとって面白い、学びたいこと」を同じ 目線で捉えてしまった。自分の授業実践を振り返り、 メンターの先生からのアドバイスを頂く中で自分の 授業における子どもの様子を思い返すと、やはり「子 どもにとって面白い、学びたい」授業ではなかった ことに気付いた。無論、「子どもにとって面白い、 学びたい」を目指し、授業を修正するが、一度「自 分にとって面白い、学びたい」授業を「子どもにと って面白い、学びたい」授業にすることは厳しかっ た。自分はこれまで何を学んできたのだろうかと悔 やんだ。それでも、この反省を自分の学びとして活 かさなければ、「自分にとって」も「子どもにとっ て」も意味がない。今一度、インターンシップの日々 を「自分にとって」も「子どもにとって」も意味が あるものするために自分の言動1つ1つをどうすべ きなのか考え直す必要がある。私の実践者としての 学びは始まったばかりではあるが、子どもにとって の学校における学びは人生において1度きりしかな い。子どもにとっての学校における学びに関わる責 任と自覚を持ち、改めてインターンシップに臨む自 分の在り方を問い直していきたい。

また、木曜カンファレンスではこのような自分の インターンシップにおける学びを整理し、省察する だけでなく、他の院生や院に在籍される先生から自分のインターンシップの学びに対するアドバイスを頂いている。木曜カンファレンスで自分のインターンシップの学びを多くの人と共有し、深めていくことで自分にも新たな学びや気付きがある。何より木曜カンファレンスを通して、自分のインターンシップにおける学びは「自分にとって」の成長に繋がるものとして改めて意味付けされていく。この「自分にとって」意味付けされたインターンシップにおける私の学びを自分で見つめ直すことにより、私がこれから関わる「子どもにとって」の学びがよりよいものとなっていくことに繋げていきたい。

さらに、木曜カンファレンスでは教員として現場に出ていくための資質・能力をあらゆる視点や方法から磨く場となっている。特に、大学生版 PISA の作成の時間では今後の教員現場で求められる教師が作り上げていく学びの在り方や子どもの学びの在り方を考えるヒントとなっている。例えば、これからの教育で求められる「主体的・対話的で深い学び」はどのように子どもと一緒に作り上げていくべきなのか、子どもが取り組んだこのような学びはどうあるべきなのか、その学びを教師はどのように評価していくべきなのか考えさせられる。

現在のインターンシップと木曜カンファレンスの 学びが「子どもにとって・自分にとって」プラスな ものとして蓄積していけるよう、目の前の子どもた ちから多くのことを吸収したい。

#### 疑問や葛藤から

#### 授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市明新小学校 山岸 千尋

朝顔が色鮮やかな花を咲かせる季節となった今日 この頃、明新小学校でのインターンシップ生活も2 年目に突入した。今年度は、2年生の学級に入らせ ていただき昨年まで見ていた高学年との違いをひし ひしと感じている。環境も変わって、戸惑うことも 多いが先生方の温かさや子どもの明るさに支えられ て日々充実した生活を送っている。1年目の時と比 べると、自分の「こうしたい!」という思いが強く なったように思う。だからこそ、浮かんできた疑問 や葛藤があった。今回は、自分の授業実践で感じた 疑問や葛藤について述べていく。また、2年目の院 生として週間カンファレンスを運営してきて苦悩し たことについても述べる。 授業実践は、6月下旬頃から始まり2年生すべての学級でさせていただくことができた。そして、自分が入っている学級で授業を行うときは院生や教職大学院の先生にも見に来ていただいた。白川文字学の「だれの足あと?」という単元で授業を行ったが、指導案検討の時点でさまざまな葛藤があった。古代文字4つと今の漢字4つを提示し、どの古代文字が今の漢字のどれに当たるか考える活動があった。「その活動は、グループワークにして他の子の意見にも触れられるとよい。」という助言もあったが、私は「グループで意見を一つにまとめてしまうことで、発言力が強い子の意見に流されてしまったり一人一人の意見が反映されなかったりするのではないか。」

と疑問に思った。また、授業を見て下さる人が多ければ多いほどたくさんの助言をいただける。それはありがたいことだが、一人一人思うことは違うので次の授業を行うときに誰の意見をどれくらい取り入れるかということも悩んだ。

「普段、学級をよく見ている担任の先生の方が的確な助言なのかな。」と思うこともあるが、大学院の先生方や先輩、仲間に相談すると「自分がやりたい授業をしたらいいんじゃない?」と言って下さった。自分が子どもにどんな力をつけさせたいか、どんなねらいを持って授業をしていくのか、そのねらいは子どもの実態を踏まえたものなのか葛藤し、考え直すきっかけにもなった。

また、この授業では古代文字を書いたカード(大・小)やホワイトボード、副読本に載っている絵(手書き)など準備物が多かった。準備物が多いということは、それだけ準備にかける時間も長く教員の負担も大きいということだ。現在は、働き方改革にも目を向けられているように限られた時間の中でどれだけ効率的に準備できるかも考えていかなければならないと感じた。

1年目と違うことはインターンシップだけではない。毎週木曜日に大学で行われている週間カンファレンスも同様に、2年目だからこそ感じられる価値がある。2年目の院生は、週間カンファレンス全体の運営だけでなく司会やファシリテートなども務め

る機会が多くなる。1年目の院生にも企画のねらい・主旨を分かりやすく伝えられるように工夫はしていたが、院生全員の思いを共有する機会もあまりなかったため「何のために週間カンファレンスをやるのか」「自分の勉強する時間を削ってまでやりたくない」という声もちらほら…。私は、週間カンファレンスでインターンシップ中に考えたことや悩みを共有したりファシリテートを経験したりすることが学校現場で生かせると思っていた。しかし、中にはそう思わない人もいて必ずしも何らかの意味を見い出せる人が正しいわけではないのだと気づいた。

自分のファシリテートについても課題がある。特に午前1の学びの振り返りでは、「最近どう?」「話したい人一?」といったいい加減な言葉で話を進めてしまうことが多々ある。先輩や友達にも「午前1ってどうやってファシリテートしてますか?」と聞いたこともあった。「手始めにインターンシップとは別の話をして話しやすい雰囲気を作っている」「普段、院生室で話していることからつなげることもある」とさまざまな意見が出たが、それらを参考にしながら自分なりのファシリテートを見つけていきたい。

インターンシップでも週間カンファレンスでも疑問や葛藤から考えることや新たな発見があった。これからも疑問や葛藤から生まれる自分の考え、新たな発見を大切にしていきたい。

#### 「協働しよう。」は難しい。

#### 授業研究・教職専門性開発コース2年/附属義務教育学校前期課程 日野 晶

M2 になり、企画運営側になったことで会議が多く なってきた。この会議は協働の場としてうってつけ だ。しかし、会議での私は積極的に発言してしまう。 「発言してない人の考えの邪魔になってしまってい るのではないか」と考えることも多くある。他の院 生に相談した際に「考えているので精一杯、思って いることはだいたい言ってくれている。ありがたい。」 と言われた。なんだか救われた気になった。「でも、 発言していない人がしにくいと感じる雰囲気にはし たくない。」と感じていたことから、なるべく誰も が言いやすい雰囲気作りを意識していこうと思った。 そんな中、やはり意見を言わない院生もいたことが 「何を考えているんだろう。余計なこと言ってない かな。」と思って不安に感じてしまう時もあった。 段々と会議をしていく中で、M1の頃の自分のインタ ーン先の子どもと重ねて考えていくうちに、人には

考えるペースがあることを思いだす。私はこれまで 物事の考えに個人差があることに気づかずにM2会議 をしていた。しかし、子どもには考え方にもスピー ドがあることを踏まえながらインターンに行ってい たことは大人でも当てはまるのではないかというこ とを考え始めた。「考えるペースが人それぞれで、 そのペースを平均にした会議…なんだそれ。」と思 った。今、会議の時にそれぞれみんなが考えている 流れがわからないと感じることがある。そして、全 体で考える時に"間"が度々出る。悩み、進めなく なっていくことで誰も発しなくなる時間ではなく、 ある程度案が出ているにも関わらず、いきなり立ち 止まる"間"である。「この間なんだろう?」と思 う時もある。時間短縮の効率の良さを考えるならそ んな間を作らずに次々と進めればいいのではないか とも思う。しかし、前に「ファシリテーターとは」

を木曜カンファレスの主担当企画(院生が中心となってテーマを決めて話し合っていく活動)で考えていった際に「意味のある間を作る」と言っていたことを思い出し、「この間が、意味のある間なのか?」と度々考える。しかし、間が空くと私の思考は止まってしまうことがあると感じる。私はなんとなくはっていることを自分の口で言ったり、人の考えを聞いたりした時にようやく整理できる時が多いで、なんとなく思っていることをそのままにしたまの誰もなにも言わない間があると思考が止まってしまう。そんな"間"はまさに私にとって効率悪く感じてしまう時間でもあった。

そんな時、同じM2の吉田院生に「話し合いの効率を良くする必要がある。それは時間短縮とかそういう効率ではなく、誰もが同じように考え合う、話し合えることができる場作り。そんな効率良く話し合いできる場作りってどんなのだろうね。」と言われた。まさに、"思うこと""考えるペース""それぞれの経験"全てが同じ人なんでいない。そのユニアイの大人との協働の難しさいるのだとも思う。それの難しさを今現在感じているのだとも思う。でもコミュニテイ形成は非常に難しく、まずは相ももの考えの流れがどのようにといるのかにというのよいで、大人に対する見取りが自分にというのよく考える。『模索して活動していく中で、互いの能

力を最大限発揮し、より選択肢を増やしていくこと で新たな価値を創造すること。』と自分なりの価値 付けを考えてみるものの、難しい。他の人の意見か らみんなの話していく内容や価値が広がって深まっ ていく可能性があることはわかる。しかし、お互い の能力を最大限に発揮するためにまず自分自身の特 徴、能力を見極めると同時に、協働するための同じ 環境にいる人の特徴や能力を認め、見極めていかな いとならない。むしろこの関係は無意識的にも見極 めあって、認め合っていくことが協働していく大前 提になってくるのではないかと思うと協働はとても 高度なものに感じる。そうして私が協働に対して考 えが行き詰まってきた時、ある A 教諭に「自分が先 生だったらどうする?」と言われた。そこで、振り 返りを書いたり、ホワイトボードを使ったり、付箋 に思いを出させたり、と色んな方法を用いて思いを 共有し合う場作りをするなと思った時にハッとした。 私はここでも子どもに対する思いと大人に対する思 いを別にして考えていた。しかし、協働の場作りは 子ども大人関係なく、人として共通するのだと気づ いた。そしてそこで話し合いの効率を上げるには 様々な協働の場を作り出して、全員が思いや目的を 共有でき、よりよい方向へ進むための自分たちに合 う方法があるのではないかと思った。会議を全員に とって価値のある時間にしたい。お互いの能力を最 大限に発揮できるやり方を、私たちのM2に合ったや り方を探っていくことが今大事なのかと感じる。

#### おかれている環境の「質」を高めていく。

#### 授業研究・教職専門性開発コース2年/附属義務教育学校前期課程 竹内 達郎

M2 として2年目のインターンシップを過ごす中で、自分が深く考えたことは、限られた中で自分がどのように活動を進めていくべきかということである。2年目になり、教員採用試験、学部の授業を受ける関係上、それまで週3日行っていたインターンシップを、週1日で行っている。それは大きな違いであると感じた。今年は4年生のクラスでのインターンであったが、昨年担当していた5年生の時があったからか、とても自分から積極的に発言する子がいる半面、おとなしくなかなか前に出ることができない子など、一人ひとりの差があるように感じる。一人ひとりとかかわり、その子との距離感を正確に把握していくことの必要性を強く感じた。

週1日でしか活動を行うことができない分、あまり子どもたちについて知る機会がないということも一因なのかもしれないと感じ、授業中にできる限り子どもたちの活動の様子を子どもに寄り添った状態で参観することを心掛けるようになっていった。1年目の時の週3日あるときのインターンでは、あまり行動を起こしていなくても客観的に見て子どもの性格などを把握しやすい面があった。子どもから見ている部分も多々あったもののような距離感では、週1日だとどうしても埋まり切らない部分が出てくると5月ごろに強く感じたいらである。そこで、実際に授業中の中でも可能な限り近くで子どもと話してみると、子ど

もたち一人ひとりがどのような場所で困っているの かとても強く感じることができた。

特に子どもごとの違いが感じられたのは、算数の「垂直と並行」の部分である。この部分の作図では、様々なパターンのミスを見つけることができた。いくつか例を挙げてみる。普段から、少し算数が苦手な印象を持っているAさん。Aさんは、三角定規のどの部分を合わせると垂直をうまく弾くことができるのかを少しおさえきれていないようであった。直角である部分をうまく扱えずに、まっすぐに線を引けていなかったりうまく並行にかけていなかったりしていた。そこで、三角定規の角度について確認したのち、直角の部分をどのように扱えばいいのかを相談する中でおさえていくことをしてみた。すると、少しイメージがついたようで、簡単な問題なら解けているようであった。

また、普段から問題を解けている子であっても、 勘違いしている場合もあった。普段から積極的に授業に参加しているB君もその一人であった。B君は, 並行をかく際に、三角定規を合わせる方法はあっているが、順序が違っているために、正確に並行を引けていなかった。パッと見ただけではあっているように見えるが正確に測りなおしてみると違っているという状態であった。一番始めに基準となる直線に定規を合わせなければいけないところで、その三角定規に合わせるはずの定規を先に並べてしまう。それを担こされると、微妙に違った線が描かれてしまう。それをなくすために、自分が測りなおすことで、うま直 していけばよいかを尋ねてみた。すると、手順が少 し違っていることに気づき、修正することができて いた。

一人ひとりを見ていく中で、その子にあった指導 を行っていくことは、とても難易度が高いことであ るが、その分、問題が解決して嬉しそうにする子を 見ることはとてもやりがいを感じる。しかし、この ように授業中の中で子どものミスをしっかり把握す る余裕があるのは、インターンシップでの授業を参 観する立場だからであり、自分が授業者であるとそ の余裕はみじんもなくなってしまうのではないかと 感じる。それをなくすためにも、子どもが思考する ための足場づくりをしっかり行うことが大切ではな いかとこの頃は考えている。自分は夏休み明けに算 数「式と計算の順序」の授業を行う予定である。こ の単元では、計算を正確に行うための順序の決まり をおさえるという、その後の単元でも常に使われる 重要な単元である。自分は1年目に算数の授業で、 子どもが自由に考えることができる活動を取り入れ た授業を行ったが、まとめきることができず、解き 方をしっかり把握することができない子が出てきて しまっていた。そのような子が出ないためにも、は じめの足場づくりを工夫していきたい。発展的な内 容についても触れたいと考えているが、地盤がしっ かりしていないと、普段からあまり得意でない子が 置いて行かれてしまう恐れがある。しっかり授業の 中でおさえるべき軸を定め、その中でどのように子 どもが思考していくことができるか、今後も深く考 え授業づくりを進めていきたい。

# 6月ラウンドテーブル報告

#### 濃霧から朝霧へ

-ラウンドテーブルでの学びとつながりを振り返る-

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市中藤小学校 佐藤 琢磨

「濃霧ではなくなったね。」

ラウンドテーブルで発表を終えたとき、グループ でご一緒させていただいた A 先生が私にかけてくだ さった言葉だ。 福井大学教職大学院(以下「福井教職大」と明記)の院生生活で、最後の夏のラウンドテーブルを迎えた。私は小学校免許取得プログラムを履修している関係で今年3年生になった。大変恥ずかしいことだが、私は福井教職大で3年間も学んでいるにもかか

わらず、自分の学びや育ちをはっきりと見出せず、 モヤモヤとしていた。長期インターンシップでぶつ かる壁は分厚く、答えがない。それは、福井教職大 での学びもまた同じである。長期インターンシップ を省察する中で課題を見つけ、仲間や先生方と一緒 に省察し、実践を再構成していく。また、M2 のメン バーが中心となって、先生方と一緒に講義をデザイ ンしていく。誰も答えを教えてはくれない。答えは 自分自身で見つけ出さなくてはならない。

思えば福井教職大での 2 年半は、ずっと濃霧の中にいた。時に学ぶ意義を見失い、葛藤した時もあった。子どもとの関わりも、授業も、省察すればするほど失敗が見えてくる。一度見出したテーマでも、次の週にはまた全く違うものになっている。実践すればするほど視点が増えてまたモヤモヤは深まっていく

このラウンドテーブルで、濃霧は少しずつ晴れていった。

初日は、学部・大学院における教員養成について 語り合う Zone B2 に参加した。グループでご一緒させていただいた B 先生の、「異質な者が協働し、一緒に汗をかく」という言葉が記憶に残っている。私たちのテーブルでは、宇都宮教職大の C 先生、静岡教職大の D 先生と修了生の E 先生がそれぞれの大学院での学びのデザインと課題をお話してくださった。

お三方のお話の中で、カリキュラムの形は違って も、現職の先生方や大学院以外の方と協働し、課題 に向かって苦労を共にするということは共通してい た。組織の抱える問題に向かって一緒に考え、信頼 関係を結んでいく。それは、教育現場へ飛び込んで いく私たちに求められる力そのものだった。モヤモ ヤはモヤモヤのままで、がむしゃらになって取り組 む。その中で、組織は少しずついい方向に向かって いく。モヤモヤは成長の素である。福井教職大での 学びのエンジンは、現場で感じるモヤモヤなのだと 改めて実感した。

2日目は、少年刑務所で様々な人々と向き合ってきた A 先生、大学の学部生の F さん、そして、若手教員として教育現場で活躍されている G 先生とご一緒させていただいただき、福井教職大での学びをお話

しした。M1 の時は、教材と懸命に向き合うばかりで、目の前の子どもと向き合おうとせず、「教え込む授業」になってしまっていた。M2 の時は、「流れのある授業」を追い求め、指示・発問の簡明さを追究し、子どもの実態に合わない教育技術を振り回してきた。そして、100 回でも 200 回でも失敗を重ね、ひたすら実践に打ち込もうと決意した 3 年目を迎えた。理科の授業で、子どものふとした問いを学習課題にして、昆虫の体のつくりや育ち方を追究していくよう、デザインしてみた。教師が答えを教えようとするのではなく、一緒に考えていく。その中で、子どもたちの「昆虫を調べたい」という欲求は少しずつ高まっていった。

授業についてお話しした後、A 先生が私に「濃霧ではなくなったね。」と静かに言葉をかけてくださった。A 先生の言葉は静かな優しい声で、私の心に響いた。

その後、FさんとA先生の報告を聴かせていただいた。どちらの報告でも、目の前の人と一生懸命に、様々な人とかかわりあいながら向き合い、何度も失敗し、時に格闘しながら共に成長してきた実践者の姿があった。向き合ってきた人を中心として省察した記録からは、温かく粘り強く実践を重ねてきた足あとが見えた。

報告が終わった後、私たちは連絡先を交換し合い、またどこかで会おうと話し合った。A 先生は「人生相談いつでもいいよ。ただし、お土産を持ってきてね。」と、心をほぐすジョークを交えて、優しく声をかけてくださった。F さんと G 先生も、冬のラウンドテーブルでの再会を祈り、別れた。このお三方とは、またどこかで会いそうな気がする。いや、お互いの悩みと成長を、またじっくりと語り合いたい。

これからもまたモヤモヤは溜まっていくだろう。 けれど、濃霧ではなく、夜明けが近い朝霧の中を歩 いているような、前向きな気持ちになった。

たくさんの方とつながり、励ましていただいた。ラウンドでお世話になった全ての方に感謝を申し上げたい。本当にありがとうございました。またこの福井の地でお目にかかりましょう。

### 実践研究福井ラウンドテーブルの意味

#### ミドルリーダー養成コース1年/東京大学教育学部附属中等教育学校 福島 昌子

福井ラウンドテーブルに参加し6年になる。初めて参加したラウンドでは、様子もわからず周りの先

生方の後ろをウロウロしながらついていっていた記 憶が残っている。そのときは参加している先生方の 勢いに圧倒され「何を学んだのか」「何が吸収できたのか」それを言葉で表すことができないまま半分消化不良状態だったように思う。だが、唯一実感として残ったことは「どのように学んだのか」という学びのスタイルである。それは、職業、年齢、経験値、そのほとんどが異なった者同士が協働的・実践的に共に学ぶということで、そこから醸し出されるより深い専門職としての学び合いがあった。

しかし、ラウンドの回数を重ねるごとに自身の意識が「何を学んだのか」から能動的な意味での「何を学ぶのか」に変化し、その思考のプロセスから聞き合うこと、擦り合わせること、省察することで、自分を対象化することができ、想像以上の学びへと変わっていく自分に気がついた。これがまさに自分が考える学ぶ学び方の内的アクティブラーニングである。そして、そのすべてが丸ごと詰まっているのが、この福井ラウンドと私は考えている。

6月24日の Round Table Cross Sessions では、 5人の先生方と学生さんでテーブルを共にした。報 告者は看護短期大学のK先生、福井大学教育学部学 生Mさん、そして福島の3名だった。そして聞き手 はミドルリーダー養成M1のT先生、ファシリテー ターの教職大学院の先生だった。まずは、報告者1 として私がクラス担任をしていたときの攻撃的な発 達の特徴をもった生徒に対する対応とその生徒を抱 えてのクラス運営の困難さ、そしてそのクラスだっ たからこそ得た喜びについて報告をさせていただい た。その中でK先生に『その苦しさの中で先生を支 えたものは何だったと思いますか』と聞かれた。こ のクラスをもった2年間でそのようなことを問いか けてくれる先生はいなかった。そこで私は自分の支 えになっていたもの(こと)は何だったのだろうと 改めて考えてみた。答えは3つである。1つはクラ スの生徒、2つ目はこれまで自分が育ててきた教え 子の姿、そしてもっとも大きかったことは、新採の 副担の先生のサポートであった。その先生は初めは 新採ということもあり研修を兼ねてHRに参加をし ていたが、私が次第に特徴ある生徒のその攻撃的言 動から心身ともに苦しさが増しHRが恐怖にさえ思 えるようになったとき、何を語るわけでもなく、そ の若い先生がその場(教室)にいてくれていること に、精神的に助けられている自分に気づいた。教師 生活でこんなにも同僚に支えられたことを感じたこ

とはなかった。今回、K先生に問いかけられて初めて自分の思考のプロセスをたどり、過去の時空間で起こった出来事が整理され、他者から学ぶ省察の意味を実感した。

看護短期大学のK先生からは、学生生活の支援について報告がされた。それは偶然にも発達的特徴のある学生への対応の話だった。特に心に残った言葉は、自分が病気ではないかと悩む学生に『あなたは困っている人だと思うよ』ということである。そして当たり前のことができない学生に『どうすれば、できるようになると思う?』と寄り添いながらする言葉であった。元気のある教師ほど先に立って生徒を引っ張りがちになる。そして、先にすべき答えを声に出して言ってしまう。そのような生徒指導の中で、子どもを「待つこと」、子どもに「あずけること」の大切さを改めて気づかされ、心に響くことばをいただいた。

また福井大学教育学部3年生のMさんは、地域の子どもたちの協働探究活動を組織的に支える「探究ネットワーク」の指導的立場にあるという。その中で子どもの学びを支えるための企画・組織作りのリーダーとしての学生間の協働の難しさを語ってくれた。そこでは教師の同僚性と同じく仲間とのかかわり方とそれぞれの立場の距離をどう保つかということとコミュニケーション力の難しさが語られた。

今回のお二人の報告を伺いながら感じたことは、 職種、学校種、年齢を問わず、実践することそのも のやその力を身についていくことの難しさが、さま ざまな日常の実践の場面で課題となっているという こと。つまり、その課題を解決するために、あらゆ る場面で自分を振り返り、報告者の経験値と自分の 経験値を重ね合わせ、自分を変容させていく、それ が可能とさせるのが、この福井ラウンドと私は考え る。

初めの頃は「何を学んだのか」「何を吸収したのか」わからない自分がいたが、今は「何を学びたいのか」「何を学ぶのか」「何のために」この福井ラウンドに参加しているのかが少しだけ言葉に出して言えるようになった気がする。

最後に聞き手のT先生のアドバイスに心が救われることが何度となくあり、涙がこぼれる思いであった。とても感謝している。

#### 教師の担う役割について考える

#### 授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立福井東特別支援学校 藤田 彩恵

福井ラウンドテーブルの1日目、特別支援教育と いうテーマで話し合うフォーラムに参加をした。は じめに、麻生津小学校に勤めていらっしゃる坪川先 生の発表をお聴きした。その語りは、柔らかく分か りやすいものであった。坪川先生は内から沸き上が ってくる違和感をそのままにせず、その違和感を大 事にし、よりよい支援を考え続ける素晴らしい先生 であると思った。発表の中で、子どものための視覚 支援について次のような話があった。先生の勤めて いた小学校特別支援学級に、授業時間と休み時間の 区切りを理解することに困難さのある A 君がいたと いう。A君に対し、先生は表に「今は授業中です」と 赤文字で記し、裏に「今は休み時間です」と青文字 で記した紙を見せ、授業時間と休み時間にそれぞれ の時間に合った言葉の方が見えるように黒板に貼っ たそうだ。A君は、文字を読むことに困難さのある子 であったが、誰よりもその紙を意識して、時には自 ら裏表を変えながら生活を送ることとなった。先生 の記した紙の赤文字・青文字の区別が、A君にとって 授業時間と休み時間を区別する視覚支援となったの である。このエピソードは、「"子どもが意味を理 解し、自分で使っていける支援・手立て"が大切で ある」ということを教えてくれた。また、坪川先生 のお話の中で「特別支援教育の専門性は、知識・経 験。そして、何より"子どもの思いを理解しようと する"こと。」という言葉は特に印象的であった。 坪川先生の発表を踏まえ、小グループでの話し合い に入っていった。グループのメンバーは、福井教職 大学院スタッフの小嵐先生、県外の特別支援学校に 勤めていらっしゃる B 先生、同じ院の2年生である 吉田さん、そして私であった。自己紹介とともに、 それぞれ坪川先生の話から今考えていることを言葉 にした。その中でも、B先生の問いかけはこれから始 まる話し合いを本音で語り合うものへと導いてくれ るものであった。その問いとは、「子どもにとって、 教育は必要だが教師は必要か」というものであった。 現在、重度重複障害・病弱などの障害を抱える子ど もさんが在籍する学校に勤めておられ、PT(理学療 法士) の先生が学校にいらっしゃる現状があるとい う。科学的な根拠のあることが優先されるような空 気が少しあり、PT の先生との協働についてよりよい

在り方を考えていらっしゃった。この問いは、「教育とは何か」という話し合いに膨んでいった。具体的には、「教師は、"なぜ、このような教育を行うのか"という"そもそも"の問いを考え続ける必要があるのではないか」、「教育は、いわゆる"普通"に近づけるものでは無いと思うが、そのような状況もある」、「教師は、自分の都合で子どもとやりとりをするべきではない」といった言葉が話し合いの中で交わされた。

話し合いの中で、問いの絶対的な答えは出なかった。しかし、私にとってこの話し合いは何にも代えることのできない大切な時間であった。私は、「教師が必要か」という問いを A 先生の発言を聴くまで深く考えたことがなかった。しかし、話し合う中で自分の問いとなり追求した。一見、自分とは距離のある抽象的な問いであるが、自分の果たしていく役割について同じようにその役割に就きたい又は就いている方と話し合うことは、かけがえのないものであると知った。

最後に、ラウンドテーブルを終えた次の木曜日に あった週間カンファレンスのことを少し記したい。 そのとき、「協働」について院生や大学院の先生と 話し合う機会があったためだ。その場所で、松木先 生から看護師と教師の協働場面についてお話を聴く ことができた。松木先生は、荒木先生の実践を取り 上げられ訪問教育のお話をされた。訪問教育の場面 では、看護師は子どもの健康へのケアを行い、教師 はコミュニケーションの学習を進めるという役割を 担うことがある。実は、そのときに個々が自身の役 割にばかり目をやっていると協働にはならない。痰 の吸引を行うときに教師がことばを交わしたり、コ ミュニケーションの学習をしているときに痰の吸引 のタイミングを看護師が見計らったりする。そのよ うな"相手の専門性を最大限に発揮できるように、 自身の専門性を発揮する"ことこそ、協働であると いう。この言葉は、私にとってまだ他者の言葉であ るが、この言葉に共感する先生方もいらっしゃると 思い、ここに記した。

本当に、多くの方のお話に学ばせて頂いた6月で あった。

#### 出会い

#### 学校改革マネジメントコース2年/若狭町立上中中学校 竹村 嘉明

# 1日目シンポジウム ZoneA 学校「子どものコミュニティを支える教師のコミュニティ」

福井県立坂井高校の吉田校長の発表を聞いた。高校再編により誕生した、総合産業校であることの強みを生かした取り組みについてであった。坂井高校は、農業、商業、工業など様々な学科の8学級がある職業系の高校であるため、その強みを生かし、学科間連携による「坂高マルシェ」の話が心に残った。自分の専門学科の立場から、生徒が意見を出し合って一つのお店を経営するという、探究的な活動が行われている。福井県内では、高校再編の動きが継続しており、これから生まれる新しい枠組みの高校にも、このような活動が広まればよいと思った。

今年度は2年生の学年主任になり、総合的な学習の時間の年間計画をたてた。探究的な活動をどうデザインしてよいのか迷っているところであったので、校種の違いや活動内容の違いはあるが、参考にできる部分がたくさんあった。生徒自身でお店の中の環境について考えたり、資金源や利益の計算をしたりと、中学生には高度なことは無理かもしれないが。

#### 2日目クロスセッション

奈良女子大学附属小学校でインターンシップを行っている院生の発表を聞いた。奈良女子大付属小は、昨年度の学習研究発表会に参加したことがあり、とても興味を持った学校である。子どもの生活の中から課題が生まれ、協働して探究する学習が行われている。授業づくりについて悩んでいるという報告であった。授業のデザインが、子どもの発見や発言によって変わっていくので、大変そうであった。この院生は、自身も附属出身であるとのことであった。奈良女子大付属の卒業生が、自身も経験してきた学びのスタイルについて、教師の立場で悩んでいることがとても新鮮であり、教師という職業はそういうものであると改めて感じることができた。

もうお一方、静岡県富士市立高等学校の遠藤先生 の発表を聞いた。学校改革(探究のカリキュラムづ くり)に取り組んでいるという内容であった。市内 の地区ごとに生徒のチームを送り込み、各地区の課 題を解決するために活動するというものである。高 校生である自分たちにできることを考え、実行する とのことであった。資金は、永く持続させるために も、市からの補助は受けずに行っている。また、学 術顧問として金工大の学長さんに相談して進めてい るという報告であった。

まさに現在2年生で行っている総合学習の活動と ほぼ同じであり、共感しながらお話を聞かせていた だいた。この1学期間は、若狭町をPRする方法を考 え、実行に移した。今後は、町の課題を探り、自分 たちにでもできることを考え、実行に移すという活 動に移行する。町の人たちは、自分たちの町の課題 をどんどん指摘してほしいと思っている。遠藤先生 によると、地区ごとに生徒をチーム分けすることで、 高校生は言いたいことが素直に言え、市のニーズと ぴったりあうのだということであった。若狭町にも それは当てはまるかもしれない。また、ファシリテ ーターの福井キヤノン会長の玉木先生からは、企業 や商工会、ロータリークラブなどの協力を仰ぐこと もできると教えていただいた。今後の活動に対する 勇気がわいてきた。活動に対するアドバイスをいた だこうと、町出身の若新雄純氏を招き、今後の活動 の計画をたて始めた。生徒をチーム分けし、町の大 人(役場の職員)にチームに加わっていただき、町 の課題を解決する活動を行うというものである。楽 しみになってきた。

今年度、自分が置かれたポジションに関わって、 このような貴重な出会いを与えていただき、ラウン ドテーブルにはとても感謝している。

#### ラウンドテーブルで得た新たな発想

#### 学校改革マネジメントコース2年/福井県立羽水高等学校 川崎 直樹

5回目の参加となった今回のラウンドテーブルでは、昨年度1年間の羽水高校ISN事務局の取り組

み、中でも今年度3年目を迎えたプロジェクト学習 (PBL) について報告させていただいた。羽水高

校のPBL「市役所に提案!」は、福井市の様々な 課題について1年生の生徒たちが半年かけて調査し、 年度末の3月に市役所職員を学校にお招きしてポス ターセッションの形で解決策を提案するという展開 になっている。毎年様々な部分に改良を加えている ので、それなりに納得できるものになってはきたが、 様々な学校の実践事例を知り、またラウントテーブ ルでお会いした方々と情報交換する中で、私自身は 「市役所に課題解決策を提案するだけで完結し、何 のアクションも起こさないのでは、結局生徒の得る ものが少ないのではないか」「もっとじっくりと、 長いスパンで探究活動をデザインしてもよいのでは ないか」といったことを考えるようになった。そん な中で参加した今回のラウンドテーブルで、私は羽 水高校PBLの今後の方向性について新たなヒント を得ることができた。

参考になったのは、東京都昭島市で社会教育主事として様々な実践を行っている来住野さんの報告だった。来住野さんの報告の要点は「地域で魅力的な活動をしている人をいかに繋げていくか?」ということだったのだが、お話しをうかがう中で私は、こうした方々と高校生を繋ぐことが必要なのではないかということを強く感じた。来住野さんによれば、地域の方々の共通の悩みは、地域の行事に高校生がなかなか参加してこないことだという。特に地域に住みながら地域外の学校に通うことの多い高校生は、そこにいるのに活かされていない存在になってしまっている。従って、高校生が地域の行事にもっと積極的に参加できるようになれば、地域の方々は喜ぶ

し、高校生自身も地域の役に立てていると実感でき るだろうとのことだった。

実は今年の4月、福井市の木田公民館から「木田 祭りの屋台に羽水高校生を参加させて欲しい」とい う依頼があった。きっかけはPBLの調査活動のた め、昨年の10月に一部の生徒が木田公民館に取材 に出向いたことだった。その後、公民館の方の直接 依頼を受けた生徒からも相談があったため、ISN 事務局が窓口となって2年生の生徒に参加を呼びか け、集まった10名程度の生徒が木田祭りで屋台を 出店することになった。「木田奴(きだやっこ)」 という地域の若者グループと協働して、地域の子ど もたちが喜ぶ屋台の企画を考えていくとのことであ る。私はまさにこうした要素を、今後の羽水高校P BLの中に組み込むべきなのではないかと考えてい る。つまり、福井市の課題を乗り越えるための提案 をするだけではなく、市民や公民館の方々と連携し て行動させるということだ。行動する中で生徒たち は多くの人と出会い、さらに多くのことを学ぶに違 いない。1学年につき350名近くいる生徒の全て をうまく動かすことには困難が伴うと予想されるが、 何とか実現に向けてプランを作っていきたいと考え

ラウンドテーブルには様々な方が参加しており、 それぞれの立場で取り組んでいる様々な実践や考え に触れることができる。そうした「異質なものとの 出会い」が新たな発想を生むのだということを、私 は今回のラウンドテーブルで体感できた。さらに言 えば、こうした出会いを生徒たちにぜひさせていき たいものだと思う。

#### Schedule

8/16 Thu - 8/18 Sat 夏期集中サイクル 3a 8/20 Mon - 8/22 Wed 夏期集中サイクル 3b 10/13 Sat 10月合同カンファレンス(A日程) 10/20 Sat 10月合同カンファレンス(B日程)

【編集後記】今年の夏はとにかく暑い。複数の都市で40℃を超え、観測記録も次々と更新されている。この未曾有の暑さは誰も経験したことがない環境だ。一方で、これは新たな探究テーマになるかもしれない。大人も子どもも今後どのようにしてこの環境の変化に適応していけば良いのか。皆が「学習者」として分野を超えて、知識、アイディアや新たな発想を結集しながら探究する機会がめぐってきたのではないだろうか。今こそ「協働」と「探究学習」のサイクルが試される(花井渉)

教職大学院 Newsletter No.114

2018.8.16 内報版発行 2018.8.31 公開版発行

編集・発行・印刷 福井大学大学院 福井大学・ 奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学 連合教職開発研究科 教職大学院 Newsletter 編集委員会 〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp